「高校生の社會生活」

第一報告 —友人構造について—

千葉大學講師　四　宮　　晟

This study is intended to the investigation in the construction of friendships of boys and girls in upper secondary school and to contribute to the guidance of social developupils of them.

With this aim, pupils of Chiba Prefectural Nagasa Upper Secondary School (407boys and 151girls, as a total 558 pupils) were chiefly inquired by questionnaire method.

The contents of this treatise consist of four parts: the first part —the scale of friends, the second part—the subjective and objective factors involved in parting and meeting, the third part —the examination of relations of friends and and factors influencing the selection of associates, the fourth part —character of leaders among them, and summary.

1、研究の目的

本研究は高校生に於ける友人構造—友人の範圍、友人結合・離反の主觀的，客觀的要因、友人間に於ける指導者等の問題—を明らかにしてその社會的發達の指導をより完全ならしめようとするにある。

2、研究方法・期日・被調査者・調査校の特色

本研究の調査對象は千葉縣安房郡鴨川町縣立長狹高等學校生徒558名（三年生男子126名、女子23名、二年生男子161名、女子47名、一年生男子129名、女子81名）である。同校は千葉縣下に於ける最も古い男女共學校である。昭和23年新制高校制實施と同時に共學を行つた實驗校で現在は鴨川町本校々舍全日制課程に男子448名、女子220名を有つ最も男女の均衡がとれた共學校の一つである。尙當校の卒業生中、例年、上級學校進學者は概ね3分の1であつて大學豫備門的性格は極めて薄く、鴨川漁港にのぞむその地理的環境は隣接町村に漁・農村をひかえもつ特殊な地域である。

性格檢査及び知能檢査は昭和26年1月16日、17日に實施されたものである。

研究の主要部をなしている部分については昭和26年1月、主として質問紙法によつて研究調査されたが、當時研究者が同校に在職していた關係上、觀察・面接・個人調査書・指導要錄その他諸資料を以つて補つた部分も極めて多い。（尙本研究は昭和26年度文部省科學研究助成費の交付による「高校生の社會生活」の一部である）

3、研究の内容

第一部　友人關係の範圍

Ⅰ　校内に於ける友人の重要度

Ⅱ　校内及び校外に於ける交友範圍

Ⅲ　向性指數と交友範圍

Ⅳ　校内に於ける嫌いな友人の範圍

第二部　友人關係に於ける結合・離反の主觀的・客觀的一般要因
　Ⅰ　校內友人關係に於ける結合
　Ⅱ　校外友人關係に於ける結合
　Ⅲ　嫌いな友人關係に於ける離反
第三部　結合關係及結合要因の吟味
　Ⅰ　友人の層構造
　Ⅱ　複合要因數の決定
　Ⅲ　結合度と要因の吟味
第四部　友人間に於ける指導者と性格
要　約

第一部　友人關係の範圍

Ⅰ　校內に於ける友人の重要度

第一表　學校に來て最も樂しいものは

區分／項目	三年 男	三年 女	二年 男	二年 女	一年 男	一年 女	三年	二年	一年	計 男	計 女
友人と話しが出來る	78%	52	61	68	55	47	74	62	54	65	56
家事を手傳はなくてよい	2	—	2	—	—	—	1	2	—	1	—
勉强が出來てよい	11	44	29	26	35	48	16	28	38	25	39
スポーツが出來てよい	4	—	3	—	1	—	3	2	1	3	—
その他	—	—	1	—	2	1	—	1	2	1	—
無應答	5	4	4	6	7	4	5	5	6	5	5

第一表は「あなた方が毎日學校に來て最も樂しいと思うものは何ですか」という問に對する答を統計したものであるが、これによつて友人關係が校內生活にとつて如何に大切な役割を果しているかゞ明らかである。尙私は昭和廿五年三月の卒業生約150名に對しても同樣な質問をなし「友達と話しが出來ること」65%、「家事を手傳はなくてよい」15%、「勉强出來てよい」10%、その他10%の結果を得ている。

Ⅱ　校內及校外に於ける交友範圍

第二表　校內に於ける交友範圍

區分／範圍	三年 男	三年 女	二年 男	二年 女	一年 男	一年 女	三年	二年	一年	計 男	計 女
ナシ	1%	—	4	11	1	10	1	5	5	2	8
1人	5	5	9	15	8	24	5	10	15	7	19
2人	8	21	15	26	22	28	10	17	25	15	26
3人	21	17	15	9	21	20	20	14	20	19	16
4人	13	5	20	17	16	10	11	20	13	16	11
5人	49	52	35	20	32	8	50	31	22	39	18
5人以上	3	—	2	2	—	—	3	2	—	2	1
平均	3.95人	3.79	3.51	2.75	3.38	2.19	3.94	3.34	2.91	3.61	2.59

第二・三表は校內・外の親友を無制限に列擧させたものの統計である。（尙この場合相互選擇の場合も一方選擇の場合も含んでいる。）[1] 第二・三表から

（1）學年の進む程校內交友範圍は擴大し、三年生と一年生とでは平均約一人の差がある。

（2）性差に就いては（校內の場合）（0）、1、2人の少數は女子が多く、3人以上の多數の交友範圍は男子に多い。（校外の場合）も同樣で男子の方が多くの友人關係（親友）をもつている。

（3）校內交友關係の範圍は平均3・4人（男子3・61人、女子2・59人）、校外のそれは平均1・5人（男子1・51人、女子1・45人）である。[2] 校外友人關係1人に對して校內は2・24人であつて、校內友人が社會性發達上重要な影響をもつ事を知ると共に、相當な比率をもつ校外友人に對しても友人指

第三表　校外に於ける交友範圍

範圍＼區分	三年 男	三年 女	二年 男	二年 女	一年 男	一年 女	三年	二年	一年	計 男	計 女
ナシ	28%	13	25	15	9	20	25	22	14	21	17
1人	27	26	27	30	33	50	26	28	40	29	40
2人	24	26	30	23	39	27	24	28	33	30	26
3人	20	30	18	28	18	3	22	20	12	19	15
4人	1	5	—	2	1	—	2	1	1	1	1
5人	—	—	—	2	2	—	—	1	1	1	1
5人以上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
平均	1.42人	1.87	1.41	1.78	1.72	1.15	1.49	1.49	1.44	1.51	1.45

導の要を感じさせる。

（4）校内に交友關係の無いものは僅少であるが、校外には相當數（約20%の者）ある。又校内では5人までの交友關係は見られるが、校外では3人までが大部分で校内に比して幅が狹い事を知り得る。

Ⅲ　向性指數と交友範圍

向性テスト施行の結果、第四表の如き統計を得た。M, S D. 共各學年差は僅少であるから、平均數値をとつて男子M＝108、女子M＝106とし男子のS.D.を17、女子のそれを17とし第五表の向性指數段階表を作成した。今これに依つて交友範圍との關係を表示して見よう。（第六・七・八・九表參照）

第四表　向性檢査の結果

學年＼區分 性別	M 男	M 女	S. D. 男	S. D. 女
3年	109.6	106.2	16.1	18.6
2年	108.3	106.3	17.2	16.2
1年	107.7	105.8	18.3	17.4

（1）校内・外共 V. Q. O 段階者が最も多くの友人をもつている。校内關係では男子3•9人、女子3•0人、校外では男子1•7人、女子1•6人であり、各學年別に就いても全く同一の傾向である。

（2）V. Q. が＋及－に進むに從つて交友範圍は狹少となるが、外向性の者は内向性の者よりも友人關係は多い。即ち校内•外共＋1段階者は－1段階者より、＋2段階者は－2段階者より、＋3段階者は－3段階者よりも友人が多い。

第五表　向性指數段階表

段階＼指數		指數範圍 男	指數範圍 女
外向型	＋4	168—	166—
	＋3	151—167	149—165
	＋2	134—150	132—148
	＋1	117—133	115—131
標準	0	100—116	98—114
内向型	－1	83—99	81—97
	－2	66—82	64—80
	－3	49—65	47—63
	－4	48—	46—
平均		108	106
標準偏差		17	17

（3）内向性の強い者は校内では友人關係があつても校外友人關係が結ばれ難い。此等の者達にとつては校内友人關係が、對人交渉の非常に緊要な機能を果している。

Ⅳ　校内に於ける嫌いな友人の範圍

第十表は校内の嫌いな友人を無制限に列擧させたものを統計した結果であるが、これに據ると

（1）校内の拒否關係は極めて少數で平均1人に達せず總計では0•7人であつた。

（2）性差に就いては男子の方が嫌いな友人關係は少い。即ち男子では40%、女子では55%が嫌いな友人をもつている。又2、3人の（多數の）嫌いな友人をもつものも女子に多い。これはⅢの結果と對蹠的である。

（3）學年の進むに從つて嫌いな友人は減少する。（但し女子には殆んどこの傾向が見られない。）

第二部　友人關係に於ける結合・離反の主觀的・客觀的一般要因

Ⅰ　校内友人關係に於ける結合

（a）第十一表は學年組別と友人關係について第一部の友人關係全部を統計したものである。この結果から次の事を知る。

第六表　V.Q.階段と校内友人關係（男子）

男子＼V.Q.段階	−3	−2	−1	0	+1	+2	+3
3　年	3.0人	2.3	3.9	4.3	3.9	3.9	3.8
2　年	2.5	3.2	3.5	3.6	3.4	3.5	3.0
1　年	—	3.0	3.0	3.7	3.6	3.3	—
計	2.7	2.9	3.5	3.9	3.7	3.7	3.4

第七表　V.Q.段階と校内友人關係（女子）

女子＼V.Q.段階	−3	−2	−1	0	+1	+2	+3
3　年	—	1.5人	3.4	4.4	3.7	2.0	—
2　年	1.0	2.0	2.4	3.0	3.0	—	—
1　年	—	2.1	2.2	2.5	2.3	2.0	—
計	1.0	2.0	2.5	3.0	2.8	2.0	—

第八表　V.Q.段階と校外友人關係（男子）

男子＼V.Q.段階	−3	−2	−1	0	+1	+2	+3
3　年	0.0人	0.0	1.3	1.7	1.5	1.4	1.2
2　年	0.9	0.9	1.3	1.6	1.5	1.5	1.2
1　年	—	1.4	1.7	1.8	1.7	1.4	—
計	0.7	1.1	1.4	1.7	1.6	1.4	1.2

第九表　V.Q.段階と校外友人關係（女子）

女子＼V.Q.段階	−3	−2	−1	0	+1	+2	+3
3　年	—	1.0人	1.4	2.2	2.2	1.0	—
2　年	1.0	1.6	1.2	1.8	1.7	—	—
1　年	—	1.1	1.2	1.3	1.2	1.0	—
計	1.0	1.2	1.3	1.6	1.0	1.0	—

第十表　校内の嫌いな友人の範圍

範圍＼區分	三年 男	三年 女	二年 男	二年 女	一年 男	一年 女	三年	二年	一年	計 男	計 女
ナシ	73%	42	60	44	48	46	67	55	45	60	45
1人	19	17	29	32	37	34	19	30	37	27	30
2人	4	8	5	4	11	18	5	5	14	7	12
3人	4	33	6	20	4	2	9	10	4	6	13
平均	0.4人	1.4	0.6	1.0	0.8	0.8	0.6	0.7	0.8	0.6	1.0

（1）友人關係は同學年間に最も多い。（男子の94%、女子の95%は同學年間である。）

（2）上・下級學年との結合は近い上級學年との間に結ばれ易い。（二年生は一年生よりも三年生との間に、一年生は三年生より二年生との間に結ばれ易い。）

（3）學年の進むに從つて同級間の結合が減少しているのは編成替・在學期間の長いこと等に因る交友範圍の擴大の爲である。

（4）然し乍ら同組間に結ばれる率は異組間に結ばれるそれよりも多い。（例えば三年生男子については四組編成であるから一組當の平均は25%であるが同組間の29%は高率となる。二、三年は五組編成故、一層同組間の率は高い。）この年令に於いても接觸は結合への前提條件である。

（5）性差は見られない。

第十一表　校内友人關係と學年・組別

學年組＼區分	三年 男	三年 女	二年 男	二年 女	一年 男	一年 女	三年	二年	一年	計 男	計 女
同組	29%	25	32	35	37	48	28	34	41	33	36
異組	68	69	59	60	55	49	69	58	54	61	59
3　年	—	—	7	4	3	1	—	6	2	3	2
2　年	2	5	—	—	5	2	3	—	4	2	2
1　年	1	1	2	1	—	—	1	2	—	1	1

（b）同町村在住者間及同通學方面間者間に於ける割合を示したものが第十二表である。

（1）同町村在住者間の結合が最も多く、特に一年生では約50%の者は同町村出身者（新制中學よりの友人關係）であるが、學年の進むに從つて他町村在住者間との結合が增大してくる。二・三年では53—54%は地理的接近とは全然

無關係であつて同町村者間は26—33%に減少する。

（2）女子は特に二・三年生では無關係地域との結合が多い。

第十二表　校内友人關係と町村別

町村別＼區分	三年 男	三年 女	二年 男	二年 女	一年 男	一年 女	三年	二年	一年	計 男	計 女
同町村	29%	15	38	15	44	55	26	33	47	36	33
同方面	22	12	16	12	14	20	20	14	16	17	14
無關係	49	73	46	73	42	25	54	53	37	47	53

（c）第十三表は性別との關係について見たものである。これに據れば

（1）異性間との交友關係は極めて少い。本研究の調査對象1854例中25例が對異性關係である。

（2）女子二・三年生では異性友人が稍々多く見られるが、これは青年期に於ける男・女の性意識・社會年令等の發達差に因る。(3)

第十三表　校内友人關係と性別

性別＼區分	三年 男	三年 女	二年 男	二年 女	一年 男	一年 女	三年	二年	一年	計 男	計 女
同性	99.1%	94.2	98.9	94.5	100.0	98.3	98.4	98.1	99.5	99.3	96.2
異性	0.9	5.8	1.1	5.5	0.0	1.7	1.6	1.9	0.5	0.7	3.8

（d）第十四表は友人關係の主觀的要因を示したものである。

（1）地理的接近は上級學年程減少し第十二表の結果と相對應する。尙同要因中同じ組48%、同通學方面24%、近所22%が主なものである。

（2）同情・愛着は各學年共可成り頻數が多いが、特に女子に於て多い。當該要因中明朗37%、親切14%、同情・理解13%、溫和7%、眞面目、男らしい、さつぱりしている各5%、誠實4%が主なもので、明るい、人好き合いのよい、開放的で、誠實味のある人柄が好まれる。尙學年の進むに從い減少の傾向がある。

第十四表　校内友人選擇の主觀的要因

理由＼區分	三年 男	三年 女	二年 男	二年 女	一年 男	一年 女	三年	二年	一年	計 男	計 女
地理的接近	15%	22	25	22	26	27	16	24	26	22	24
同情・愛着	22	15	32	49	39	51	21	34	44	30	41
共鳴	50	47	37	22	27	15	50	35	21	39	25
尊敬	10	15	5	6	7	6	11	5	7	7	8
協同	1	—	1	—	1	—	1	1	1	1	—
不明・其の他	2	1	1	1	1	1	2	1	1	1	2

（3）共鳴は各學年共高いが學年の進むにつれて多く、男子は女子よりも多いのは（2）と對蹠的である。共鳴中クラブ活動43%、氣が合う25%、スポーツ20%が主なものであつて、club活動の指導は極めて重要な事が分る。（club 活動は全友人選擇要因中の14%に當る最も頻數の多い要因である。）

（4）尊敬は各學年共10%内外を占めているが、三年生に於いて稍々多い。そのうち學力73%、指導統率力14%、人格10%が主であつて、學力優秀なものが尊ばれている。

（5）全選擇要因中頻數の多いものから順に擧げて見ると、

（1）クラブが一緒　14.4%　（4）氣が合う　7.8%　（7）近所　4.9%
（2）明朗　9.5%　（5）スポーツ　5.4%　（8）學力優秀　4.3%
（3）同じ組　9.5%　（6）同じ通學路　5.3%　（9）親切　3.7%

等となつている。

（e）第十五表は V.Q. 段階 −2 及 −3 の者、0 の者及び +2、+3の者とを選擇し夫々のグループについてその友人の V.Q. を調査し平均して見たものである。これによると外向性の者は主として

第十五表 V.Q.と友人のV.Q.との關係

V.Q.段階	−2及−3 (82—)	0 (100—116)	+2及+3 (132—)
友人のV.Q.(平均)	89.6	108.3	121.4

向外性の者を、內向性の者は主として內向性の者を選擇している。そして內向性及外向性の強い者は友人關係(5)(6)のケースが少いので、その友人のV.Q.平均値は標準値に偏倚している事が知られる。

Ⅱ 校外友人關係に於ける結合

第十六表 校內友人關係と學令

學令別＼區分	三年 男	三年 女	二年 男	二年 女	一年 男	一年 女	三年	二年	一年	計 男	計 女
+10	—	—	—	—	—	—					
+9	1	—	—	1	—	—					
+8	—	—	—	1	—	1					
+7	—	—	1	—	—	1					
+6	3	—	3	2	—	—					
+5	2 (25%)	3 (33%)	2 (22%)	2 (34%)	— (22%)	1 (22%)	29	28	22	23	30
+4	6	1	3	1	6	—					
+3	12	1	9	4	6	5					
+2	12	5	12	5	12	3					
+1 (1年上)	9	4	21	13	21	10					
0 (同學令)	122人 (68%)	25 (56%)	158 (70%)	50 (60%)	149 (72%)	66 (71%)	62	65	72	70	62
−1 (1年下)	6	2	16	5	10	5					
−2	2 (7%)	2 (11%)	2 (8%)	— (6%)	2 (6%)	1 (7%)	9	7	7	7	8
−3	4	—	—	—	1	—					
−4	—	—	—	—	—	—					

(a) 校外友人と年令(學令)との關係を調べたものが第十六表である。この表から

(1) 同學令者との間の交友關係が最も多く總計では66%であつた。

(2) 次は年長者との交友關係が多く總計では26.5%に達した。これは校內友人關係に於ける第十一表の結果(近い上級學年との關係)と相似的である。

(3) 年少者との關係は極めて少く、總計では7.5%にしか過ぎない。

(4) 又一般に年長・年少者との場合、各自の年令に近い者の方に交友關係が多く結ばれ易い。

(5) 學年の進む程同學令者間の交友關係は減少し、年長(又は年少)者間の交友關係が增す。これも校內のそれと相似であつて交友範圍の擴大を示す。

(6) 性差は殆んど見られないが、二・三年女子は年長者との交友關係が多くあらはれている。

第十七表 校外友人關係と町村別

町村別＼區分	三年 男	三年 女	二年 男	二年 女	一年 男	一年 女	三年	二年	一年	計 男	計 女
同町村	52%	26	40	40	58	58	47	40	58	50	45
隣接町村	11	35	18	22	9	9	15	20	9	13	23
無關係	37	39	42	38	33	33	38	40	33	37	33

(b) 校外友人關係と町村別の關係を第十七表に就いて見るに

（1）同町村内に交友關係を持つ者は男子50％、女子45％であつて最も多い。

（2）特に一年生は同町村に多いが、上級學年は他町村在住者との關係が増大している。これらの事實は第十二表校内友人關係と町村別の結果と極めて類似している。

第十八表　校外友人關係と性別

區分 / 性別	三年 男	三年 女	二年 男	二年 女	一年 男	一年 女	三年	二年	一年	計 男	計 女
同性	96.0％	84.4	94.3	76.2	98.5	92.8	93.7	89.4	97.5	96.3	86.8
異性	4.0	15.6	5.7	23.8	1.5	2.2	6.3	10.6	2.5	3.7	13.2

（c）性別との關係について見ると

（1）異性間との交友關係は極めて少い。本研究の調査對象833例中52例が對異性關係である。但し校内よりも異性間の交友關係が多く見られる。

（2）女子二・三年生では異性友人が相當數見られる。二年女子の異性友人中、親戚 從姉妹50％、卒業生30％、中學時代の友人20％であり、三年女子では、勉强指導をうける60％、卒業生30％、兄の友10％であつた。

（3）此等の諸結果は、併し乍ら、第十三表の校内の結果と極めてよく類似している。

第十九表　校外友人關係と主觀的要因

區分 / 理由	三年 男	三年 女	二年 男	二年 女	一年 男	一年 女	三年	二年	一年	計 男	計 女
地理的接近	26％	11	26	18	28	15	22	25	22	27	14
同情・愛着	16	11	31	25	30	50	14	30	40	27	40
共鳴	30	20	24	25	15	20	26	24	15	32	18
尊敬	18	53	13	19	23	11	27	14	20	18	20
協同	—	—	—	3	1	—	—	1	1	1	1
血縁（親戚・いとこ）	9	5	6	10	3	4	9	6	4	6	8
不明・其の他	1	—	1	1	—	1	1	1	1	1	1

（d）第十九表は校外友人關係の主觀的要因を表示したものである。

（1）大体の傾向は校内のそれと大差ない。同情・愛着及共鳴がやゝ減少し、尊敬が増加しているが、之は共鳴要因中のクラブ活動の減少と校外年長者との交友關係の割合が校内上級生との割合よりも高い事から尊敬要因が増加したのである。

（2）更に新しい事實は、血縁關係の理由による交友關係が相當頻數見られる事である。

（3）地理的接近は各學年共ほゞ同率であつて約20％を占めている。

（4）同情・愛着は各學年共可成り多く見られる要因である。同要因中明朗33％、親切15％、同情・理解14％、さつぱり8％、眞面目7％が主なものであるが、校内の場合と比較して順序、パーセンテイジ共殆んど符合している。明朗・親切な、開放的な、誠實味ある人柄は處を違えても常に好まれるのである。學年の進むに從い減少するのも校内と同じ傾向である。

（5）共鳴は各學年共高く學年の進む程多くなるのは校内のそれと全く軌を一にしている。共鳴中スポーツ52％、氣が合う43％が主なものである。

（6）尊敬は各學年共可成りな頻數を見るが、校内と同樣、三年に於て稍々多い。そのうち學力85％、指導10％、人格5％が主なもので第十四表と全く同一傾向である。

（7）全選擇要因中から頻數の多い順に列擧すれば

（1）近所 18％	（4）明朗 10％	（7）親切 4％
（2）學力優秀 17％	（5）氣が合う 9％	（8）同情・理解 4％
（3）スポーツ 11％	（6）血縁（親戚・いとこ） 7％	（9）指導 2％

等となつている。

第廿表　校外友人關係と友人の職業

學年別＼職業	學生	家事手傳(なし)	勤人	農業	工業	商業	漁水産業	教員	林業	その他
3　年	54.5%	8.5	21.5	4.5	—	4.5	3.0	3.5	—	—
2　年	52.5	17.0	11.5	8.0	5.5	2.0	2.5	0.6	0.2	0.2
1　年	40.5	26.5	10.0	8.5	5.5	4.5	2.0	1.5	—	1.0
計	49.0	18.0	13.0	7.0	6.0	3.0	2.5	2.0	—	0.4

（e）第廿表は校外友人の職業別調査である。校外友人としては學生が最も多く49%である。これは社會的・經濟的背景の近似や興味・能力・理想の近似を意味するものと解される。

▌嫌いな友人關係に於ける離反

（a）第廿一表は嫌いな友人とその學年・組別についての關係である。これによると

第廿一表　嫌いな友人と組・學年別

組別＼區分	三年 男	三年 女	二年 男	二年 女	一年 男	一年 女	三年	二年	一年	計 男	計 女
同　組	24%	25	26	30	25	42	25	28	33	25	35
異　組	70	75	62	66	49	49	71	63	49	58	60
三　年	—	—	12	4	4	2	—	9	3	6	1
二　年	6	—	—	—	22	7	4	—	15	2	4
一　年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

（1）嫌いな友人は同學年間に多い。男子の93%、女子の95%は同學年間である。

（2）その中でも異組間に嫌いな友人は多いが、率からは同組間に多いことになつている。併し第十一表好きな友人關係より割合は低く、三年生に於ては同異組共同率である事から推して接觸が結合の前提條件である事が分る。

（3）上級學年程同組間の拒否頻數は減少の傾向にあるから、第十一表―（上級學年程同組間の結合は減少する）―と比較すると同組間には親疎の中間的存在が增加する事となる。この事實からも近接は友人結合の必要條件である。

（4）上・下級學年との場合については、近い上級學年に嫌いな友人が多い。これは第十一表の結果と同傾向であつて、近接上級學年との接觸が極めて意識的である事は、我々の經驗的事實に徵しても明らかな事である。之は下級學年の上級學年に對する緊張關係の强さに依存している。

（5）性差については、男子が特に同組間に於いて嫌いな友人關係が女子よりも少い。

第廿二表　嫌いな友人關係と町村別

町村別＼區分	三年 男	三年 女	二年 男	二年 女	一年 男	一年 女	三年	二年	一年	計 男	計 女
同町村	7%	12	16	10	34	32	9	15	34	22	20
同方面	10	6	15	20	14	30	8	17	20	14	20
無關係	83	82	69	70	52	38	83	68	46	64	60

（b）嫌いな友人關係と町村別の關係について見ると、

（1）同町村在住者間には嫌いな友人が少い。平均約20%が同町村在住者であるに過ぎない。

（2）更に同じ通學方面者間にも少い事が知られる。

（3）無關係地域には嫌いな友人が多く60%に達している。

（4）學年の進むにつれて同町村間の嫌いな友人は減少し、所謂中間的存在の增加する事は（第十二表比較參照）同組間に於けるそれと同樣な傾向である。

（5）性差については著しい懸隔は見られない。

（c）第廿三表は嫌いな友人と性別との關係を見たものである。この結果を見るに、

第廿三表　嫌いな友人と性別

性別＼區分	三年 男	三年 女	二年 男	二年 女	一年 男	一年 女	三年	二年	一年	計 男	計 女
同性	90.0%	74.9	93.1	74.0	94.2	89.8	83.6	86.8	92.5	92.8	81.6
異性	10.0	25.1	6.9	26.0	5.8	10.2	16.4	13.2	7.5	7.2	18.4

（1）嫌いな友人は同性間に多い。男子の93%、女子の82%は同性であつた。

（2）男子は特に同性反撥が強い。男女間に於ける性意識・精神年令の發達差をこゝにも見る事が出來る。

（3）上級學年程異性に對しては批判的で異性拒否が增加する。特に二・三年女子は異性に對して無條件では無い。

（4）一般には女性は男性よりも異性に對して拒否的である。（男子の7•2%、女子の18•4%が異性の嫌いな友人である。）

第廿四表　嫌いな友人と主觀的理由

理由＼區分	三年 男	三年 女	二年 男	二年 女	一年 男	一年 女	三年	二年	一年	計 男	計 女
暴力•私鬪	9%	—	29	5	7	4	13	21	6	15	3
悪口•輕蔑	10	36	7	30	23	36	18	14	28	14	33
劣悪•排斥	34	36	20	10	14	20	35	18	16	23	21
疎遠•嫌悪	16	16	24	38	45	34	16	27	42	31	33
有機的反感	20	12	20	17	11	7	18	19	8	17	10
不明•その他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

（d）第廿四表は拒否の主觀的理由を統計したものである。これに據れば、

（1）暴力•私鬪は各學年共多くはないが、特に二年男子に多い。之は第廿一•三表の結果と比較するに、三年男子からの壓力に因つているものも相當であり、特にガイダンス上留意すべき點を明らかにしている。同要因中、不良暴力44%、ボス16%、たかる14%、よわいものいじめ10%、反對10%などが主なもので學校教育上配慮すべき諸點を示唆するものである。

（2）悪口•輕蔑は特に女子に於て多い。本要因中悪口60%、輕べつ30%が主なもので、批評嘲笑が之に續いている。

（3）劣悪•排斥、は各學年共男女を通じて一般に多く見られる要因である。この要因中ずるい24%、いんけん16%、しつこい11%、うそつき11%などが主なもので、結合の同情•愛着要因中の好かれる性格人とよい對比をなしている。不明朗な、閉鎖的人格や人間的に不誠實な人柄は排斥されているのである。

（4）疎遠•嫌悪は矢張り一般に最も多く見られる要因の一つであつて、同要因中高ぶる27%、利己的18%、虚榮13%、でしやばり9%がその主なものである。內容も無いのに臆面もなくわがまゝにでしやばるものが嫌悪される對象となる。

（5）有機的反感は一年生に於いてはやゝ低いが、可成りの%を占める要因となる。本要因中では氣が合はぬが90%で大部分を占めている。その次は冷めたいの項目である。

（6）尙第十四表•第十九表と比較する時、不明項目が皆無である事であつて、拒否の場に於いては何等かの意味に於いて動機原因が強く意識されている事である。

（7）全拒否要因中頻數の多いものから順に列擧すると、

（1）悪口 13.0%　（4）輕蔑 6.1%　（7）虚榮 4.3%
（2）氣が合はない 11.8%　（5）不良•暴力 5.9%　（8）陰險 3.8%
（3）高ぶる 8.6%　（6）ずるい 5.6%　（9）しつこい 無責任 2.7%

等となつている。

第三部　結合關係及び結合要因の吟味

Ⅰ　友人の層構造

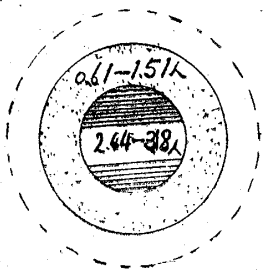
第一部の校内友人（親友として列擧したもの）について相互選擇か一方選擇かを調査した結果、三年生の全友人關係中

（1）男子は62％が相互選擇關係、38％が一方選擇であつた。之に對して

（2）女子は84％が相互選擇關係、16％が一方選擇で女子の方が相互緊密である。それ故

（3）男子では親友として友人の中心層にあるものは2.44人（3.95人×0.62）、女子は3.18人（3.79人×0.84）となり中心層友人數に於ては逆つて女子の方が多い事が明らかになつて來る。

（4）斯くして個人のもつ友人構造は層構造をなし2.44人～3.18人の中心層と0.61人～1.51人の周邊層とを持ち、更に緊密度の薄い層が之を取り圍んでいることになる。



（5）更に全校平均では相互選擇の友人關係の無いものは5％に過ぎず、95％が相互的結合の友人をもつている事が見出された。[7]

Ⅱ　複合要因數の決定

友人結合の諸條件として（地理的近接＝町村別・學級別）（暦年令・知能・學力）（性別）（趣味[クラブ]・理想・向性指數）（家庭職業・生活程度）（身長・体重）の13要因を選定し、相互選擇・一方選擇・一方拒否[8]・相互拒否（相互拒否の場合は case が無かつた）の各場合に就いて此等の條件の一致（暦年令・知能・學力・V.Q.・身長・体重は I S.D. の差以内を一致と見做した）が如何程あるかを客觀的に測定し、夫々の case に就いて一々吟味した結果第廿五表を得た。この表から

第廿五表　結合の複合度と要因

區分＼性別	相互選擇 結合要因數（平均）	相互選擇 調査事例數	一方選擇 結合要因數（平均）	一方選擇 調査事例數	一方拒否 結合可能要因數（平均）	一方拒否 調査事例數
男	7.67	140	5.63	150	4.37	45
S. D.	0.92		0.87		0.90	
女	7.25	32	5.30	14	4.31	30
S. D.	1.01		0.94		0.85	

（1）相互選擇の場合は男女共上記13要因中、7要因の複合の上に結合が量的にも緊密に成立つている事を知る。

（2）一方選擇の場合は平均結合要因數が前者よりも減少して居り平均5要因であり、相互選擇の場合よりも結合關係は量的に弱い。尙一方選擇（AがBを選擇している）場合、被選擇友人（B）の選擇友人（A）の友人n人中に於ける序列を調査して見ると、

第n番目（親友として擧げられた中の最後序列もの）……70％
第n—1番目（Aが5人親友を擧げているとすればこの場合は4番目）……25％
第n—2番目　……5％

であつてAの側に於いてもBの重要度は低いところにある（質的に）と言はなければならない。—（勿論Bの側に於いてはAは親友の序列を與えられていない）—

（Ⅲ）一方拒否の關係に就いても友人結合に役立つべき要因の一致が認められない事はない。例えば理想・趣味等の一致があつても拒否關係は成立する。結合要因と云えば結合の萬能藥であるかの

如き考えは捨てなければいけない。嫌悪の間柄でも平均4に及ぶ結合に役立つ要因數の一致が見出される。たゞそれらは結合への要因として統一がとれていないのである。

（4）青年期の親友的結合はかくして彼等自身にとつてはある一・二の理由・動機が意識されているにしても（第十四・十九表）、實は如上の幾つかの要因の織りなす全人間性の強固な結合の上に成立つている事が分る。それが偶々趣味や理想の一致として理解、調強され、同志的結合、同好的結合などと名稱づけられているだけの事である。

Ⅲ　結合度と要因の吟味

友人結合度（相互選擇・一方選擇・一方拒否の各場合）と前述の13要因との關係を考察し乍ら、結合に役立つ要因の重要度を吟味して見よう。（第廿六表）

第廿六表　友人結合度と要因との關係

要因＼性別・結合度		男 相互選擇	男 一方選擇	男 一方拒否	女 相互選擇	女 一方選擇	女 一方拒否
近隣・同方面	一致度（%）	49	50	17	30	25	18
學級		18	44	24	23	25	25
性別		99	99	90	96	97	75
家庭職業		10	8	5	11	4	11
生活程度		39	31	20	42	10	30
趣味（クラブ）		60	40	38	36	12	11
理想		49	27	9	56	19	11
向性指數	相關係數（r）	.62	.37	.39	.60	.64	.42
身長		.59	.60	.52	.55	.64	.61
体重		.58	.58	.63	.58	.56	.54
暦年令		.49	.48	.39	.59	.44	.39
知能		.42	.55	43	.63	.46	.38
學力		.83	.50	.48	.68	.48	.50

地理的近接としての近隣（同方面を含む）と學級については、近隣の方が重要であつてこれは男女共同様な傾向にあると言える。

親友として同性が選ばれるか、異性が選ばれるかは既に第一部でも考察された様に學校社會では壓倒的に同性關係が多い。しかし乍ら性の一致は逆に拒否關係に於いても特に男子では有力な拒否要因となる。

家庭關係としての家庭職業・家庭の生活程度については、その生活程度の方が寧ろ重要々因であつて、家庭職業の一致は殆んど結合要因にはならない程である。

趣味（クラブ）は現在のカリキュラムの上からは學級（ホーム・ルーム）と略々同じ意味を持つ接近性を含む要因としても考えられるものであるが、學級よりは重要な要因であつて男・女共に親密な關係に於いて一致度が高い。

理想の一致は男・女共に親友結合の重要々因であるが、特に女子に於て高い。

斯くして一致度の上から考察した上記諸要因について見るに、結合に對しては性・理想・趣味（クラブ）・近隣などが積極的關係を有する要因と考えられる。家庭關係ではその職業よりも寧ろ生

活程度に重きがあり、この年令にあつては學級（ホーム・ルーム）の一致は殆んど結合に對しては無關係とさえ見える。たゞ第　部に於いて考察された如く同ホーム・ルーム間に於いては親密ではないが友好的關係が多いのである。

次に相關係數をとつた V.Q.・身長・体重・暦年令・知能・學力について見よう。相關係數の上からは男子にあつては學力・向性指數が特に相關が著しく高く、逆に拒否關係に於いては比較的に低くなつている點から見て、學力・向性指數は積極的要因と考えられてよいであらう。身体的類似度も可成り高く身長.59、体重.58（相互選擇者間）であるが、他のよりよわい結合關係に於いても略々同値係數が現われて居り、殊更必須の要因では無いが、この係數から見ると非常にかけ離れた身体狀況にあるものの結合は成立し難い事が分る。

暦年令・知能の相關係數は他の要因に比して低い上に各結合度に於ける特別な差違も見られないところから非常に積極的な要因とは認め難い。女子についても男子と略々同樣な事が言はれるが、只々知能における相關係數が高く、結局女子が知的なものに結合の重要さを認めている事が知られる。

結論的に言へば結合要因としては性・理想・趣味・近隣・學力・向性指數などが比較的積極的な要因である。(9)

第四部　友人間に於ける指導者と性格

（a）「學校内に指導者として尊敬する友人があるか」の問いに對して「あり」と答えたものは男子49％、女子46％、「なし」と答えたもの男子51％、女子54％であつて、平均50約％の者が指導者として尊敬する友人をもち、他の者はもつていない。

（b）性別と指導者の關係を見るに男子の99％は同性で1％が異性、女子の場合は49％が同性で51％が異性であつた。かくして女子はその半數を異（男）性の指導者に求めている事になる。

第廿七表　學年・組別と指導者

區分 / 學年組	三年 男	三年 女	二年 男	二年 女	一年 男	一年 女
同　組	35％	11	24	25	26	12
異　組	65	89	42	47	40	46
三　年	—	—	33	18	6	21
二　年	—	—	—	—	28	21
一　年	—	—	—	—	—	—

第廿八表　指導者の性格

區分 / 理由 / 性別	現實 男	現實 女	理想 男	理想 女
親　好	29％	24	37	35
人　格	22	32	19	14
体　格	1	1	1	3
知力・學力	20	21	14	9
實行・活動	28	21	29	41

（c）第廿七表は學年・組別と指導者間の關係を見たものであるが、何れも同學年にその指導者を最も多く求めている。たゞ一・二年は近い上級學年に比較的多くの指導者が居る事を知り得る。

（d）第廿八表は現實の指導者を尊敬する理由及び學生間の指導者としての理想的資質を質問した結果の集計である。之を觀るに、彼等の現實の指導者が指導者として選ばれている理由は親好・實行・活動力・人格・知力　學力に於いて優れているためであつて、理想としては、主として親好と實行活動力にそれが求められている。

親好として現實に認められている主なものは親切35％、明朗21％、溫和11％などであり、理想として求められているものでは親切25％、明朗22％、理解12％、友情9％、溫和6％などが主なものである。

人格として現實には人格高潔33％、眞面目30％、謙じよう25％などが認められ、理想としては、人格55％、眞面目15％、謙じよう15％、誠實12％、正直9％が主なものとして求められている。

知力・學力として現實には頭腦明晰が99％認められ

て居る。理想としては頭腦64%、教養11%、博識9%が求められる。

實行・活動力として現實には指導力43%、責任感12%、活氣9%、勤勉7%、率先7%が主に認められて居り、理想としては、統率20%、率先13%、責任感13%、指導11%、公平8%、活氣7%、勤勉・意志・決斷7%が主に求められている。(10)

要　　約

① 學校社會內に於ける友人關係は、その社會的發達上に非常に重要な機能を果している。即ち高校生の日々の學校生活中、最も期待しているもの（高校生の65%）は友人との接觸である。又校內友人關係（親友）のないものは殆んどない（'4%）のであるが校外には親しい友人のないものが約20%もある、殊に內向性の强いものにこの傾向が認められる。

② 校內友人關係（親友）は平均3.4人で上級學年程多い。又男子の方が多いが（男子3.6人、女子2.6人）相互的結合は女子の方が緊密で相互結合の友人關係は女子3.2人、男子2.4人である。

③ 校外友人關係は平均1.5人である。

④ 向性指數標準段階者には親しい友人關係が多く且外向性者は內向性者よりも多い。

⑤ 青年期に於ける友人結合は

（a）結合への前提條件として接觸を基礎とし（同組・同町村・同通學方面には比率的に親しい友人が多く嫌いな友人は少いこと、同性間の友人—學校社會では同性間の交涉の方が多い—が極めて多い事などの實證的事實から）

（b）より外部的結合條件としての年令的（校內には同學年間、校外では同學令間に多い）、身体的（身長　体重）r.55～.59)、社會的・經濟的（校內では生活程度がよい類似しているものが結合し易く、校外では同程度の社會的・經濟的條件を豫想しうる學生仲間に親しい友人が多い）諸條件の類似性の上に

（c）より內面的結合條件として理想・趣味・向性（格）學力等の諸要因の結合の上に青年期の親しい友人關係は成立している。（これは他方、友人選擇の主觀的理由の研究からより內面的結合理由が擧げられている事からも知り得る）

⑥ 青年の友人結合は斯くの如く質的深まりと同時に又量的にも緊密なきづなによつて關聯づけられている。即ち相互結合間では前述13要因中7要因の量的一致があり、一方選擇の結合では5要因の量的一致があつた。

⑦ 青年學生間の結合に於いては知的・學力的なものが結合要因や指導者性格として高く評價される傾向がある。

⑧ 友人關係の持續度について見るに、新制中學以來の友人は一年生で47%、二年生33%、三年生26%と見做しうる。

⑨ 學年・年令間の Tension（緊張關係）は上級學年・年上者との間にあつて、この事實は校內外友人關係、嫌いな友人關係の學年別・學令別指導者の學年別の研究から知られる。

⑩ 人間は本來友好的であつて嫌いな友人は親しい友人に比して少く、男子の60%、女子の45%には嫌いな友人が無い。更にこの事實は同組・同町村同通學方面間にも少い。但し女子は男子より嫌いな友人をもつ者が多いが、個々人としても多數の嫌いな友人をもつている。

⑪ 學生間の指導者としては「明朗にして親切・友情に富む同情的理解態度の親好的性格者」及び「指導・統率力に富む責任感旺盛な實行的活動家」が求められている。　（未完）

參　考　文　献

1. Moreno, T.L. Who shall survice? 1934 を參照されたい

2. 友人數の年令的發達については
   a. 牛島 義友 幼兒の遊戯活動 立教大學哲學科年報 昭和12年
   b. 依田新・久米京子 學童の遊戯生活より見たる社會性の發達 心理學研究18卷
   c. 小林さえ子 兒童及び青年の交友 心理學研究17
   d. 依田氏は「親友というべき友人をもつていますか」の質問をし、高校生男子1年31.7%、2年57.4, 3年34.1, 女子三年は28.4, 二年22.5, 一年33.6 は親友をもたないの統計を得ている。
3. 四宮 晟 高等學校の諸問題 青年心理第1卷第2號 昭和25年
4. 小・中學校生徒の結合・理由・要因については
   a. 兼子・尾島・宮 兒童の學級内に作る友人關係について 心理學研究 6・7
   b. 田中熊次郎 學級社會における結合と分離 兒童心理 1 昭和22年
5. Fleming, E.G., Best Friends, (J. Soc. Psy chol., 3, 1932)
6. 今崎秀一 性格と交友 心理學研究15 昭15年と同様な傾向
7. 前掲 Moreno は兒童について研究し相互的結合が上學年程多くなることを見出し7年生では25%が相互結合である。
8. a. 桂 廣介 青年心理學 金子書房
   b. 桂 廣介 現代青少年の生活態度 兒童心理第3卷第6號による分類に從つた。
9. 客觀的標準尺度による結合要因の研究は
   a. Furfey P. H., Some Factors Influencing The Selection of Boys' Chums. (J. Appl, Psychol., 2, 47 - 51, 1927.)
   b. Almack, J. C., The Influence of Intelligence on The Selection of Associates. School & Society, 1922)
   c. Wellman, B., The School Child's Choice of Companions. (J. Educ. Res., 1926)
   d. Partridge, E. D., A Study of Friendships among Adolescent Boys. (J. Genet. Psychol., 1933)
   e. Jenkins G. G., Factors involved in Children's Friendships. (J. Educ. Psychol. 1931)
   f. Seage, M. V., Factors Influencing The Selection of Associates. (Educ. Res. 1933)
   g. Vreland, F., and Corey, S. M., A study of College Friendships. (J. Abnom. (Soc.) Psychol., 1935)
10. 學級における社會的地位については
   a. Bonney, M. E., A Study of social Status on The Second Grade Level. (J. Genetic Psychol. 1942)
   b. Bonney, M. E., Personality Traits of Socially Successful and Socially Unsuccessful Children. (J. Educ. Psychvl. (1943)
   c. Jersild, A., Child Psychology. 1946
   d. Hardy, M. C., Social Recognition at The Elementary School Age. (J. Soc. Psychol. 1937)

後 記：本研究に對して今日も尚多大の便宜を與えられている千葉縣立長狹高等學校に對して厚い感謝の意を捧げるものである。